

聖書：士師記13章15～25節

説教：わたしの名は不思議

はじめ

前回からしばらく時間があきましたので、簡単におさらいをしてから今日の所を見ていきます。士師記の時代、イスラエルは自分たちの神を捨て、バアルの神々を拝んで墮落してしまい、それで主はイスラエルをペリシテ人の手に四十年間渡し、苦しみを与えます。ふつうなら、自分で蒔いた種、「自己責任」で終わりですが、聖書ではそこで終わりません。罪を犯したのは確かにイスラエルです。けれども主は、「苦しむ姿を見るのは忍びがたい」と語り、イスラエルに救いの手を差し伸べようとします。そこで主はご自分の使いをマノアの妻に遣わし、こう言わせる。あなたがたに男の子が生まれる。その子がやがてイスラエルをペリシテ人の手から救う。あなたは今後一切強い酒を飲んではならないし、生まれてくる男の子の頭にはかみそりを当ててはならない。ところが、主の使いが現れたとき、夫のマノアはそこにいません。妻の話を聞いても信じられません。そこでマノアは、もういちど神の人を使わしてくださいと祈ったところ、主の使いが現れた。それが今日の場面になります。さっそく見ていきましょう。

1 マノア

1) 名を尋ねる

15節。「マノアは主の使いに言った。『私たちにあなたをお引き止めできるでしょうか。あなたのために子やぎを料理したいのですが。』」中東文化では、家にお招きしたお客さんを料理でもてなすのは大切な習慣です。ところが主の使いはこう語る。「わたしはあなたの食物は食べない。もし全焼のささげ物を献げたいなら、それは主に献げなさい。」マノアは意外な返事を聞き、とまどいながら恐る恐るこう尋ねます。「お名前は何とおっしゃいますか。あなたのおことばが実現しましたら、私たちはあなたをほめたたえたいのです。」「あなたのおことばが実現したら」というのは、これから生まれてくる男の子がイスラエルをペリシテ人の手から救い始めるという約束のことです。それが実現したとき、誰に感謝すればよいか。「あるとき現れたおじさん」では格好が付きません。そこで、きちんとあなたのお名前を伺っておきましょう、という意味で名前を尋ねた。

2) 名は「不思議」

すると主の使いはこう答えます。18節。「なぜ、あなたはそれを聞くのか。わたしの名は不思議という。」

これだけではよくわかりません。参考までに、ほかの聖書を見るとこう訳しているものもあります。「どうしてわたしの名前を聞くのか。あなたの理解を超えていることです。」

3) 聖書における名前

マノアは、ごくふつうに名前を聞いただけです。少なくとも本人はそう思っていた。でも、聖書において名前というのはどんな役割をもっているのか、ちょっと考えていただきたい。たとえば神が光を造られたとき、どのようにして造ったのか。「光、あれ」と語ったら光が現れた。名前を呼ぶことによって、光がこの世界で輝くようになった。名前が存在そのものと強く結びついている。人であれば、名前がいのちそのものを表す。それだけの重みがある。マノアは、あたりまえのように名前を聞いたつもりだった。ところが、聞いた相手が主の使いだったので、全然重みが違う。マノアはまったく気がついていませんが、神の存在そのものを尋ねようとしていたことになる。だから主の使いは答えるのです。「あなたのいまの信仰では理解できないでしょう。不思議にしか思われないでしょう。」

2 主を知る

1) 主が現れてくださる

皆さんはこんなことを考えることがあったのではないか。「神さまのことをもっとよく知りたいけれど、聖書のことはよくわからないし、信仰もあるとおもわれないし、こんな私が神さま知るのは無理。」

そんな方はマノアを見てください。マノアは主の使いが現れても、その方が誰であるかまったく気がつかない。せいぜい、預言者の一人なのだろう、くらいにしか考えていない。たしかに聖書のことをまったく知らなかったわけではない。このふたりは、ナジル人の誓いのことを知っていました。ユダヤ人として聖書の基本的な知識はあった。また、8節では「ああ、主よ」と祈っているの、信仰もないわけではない。けれども、いざ主

の使いが来たとき、それが誰であるかわからない。その程度の信仰だった。このことからなにがわかるか。二つ挙げることができます。

一つ目。主の使いは、素晴らしい信仰者のところに現れたのではありません。「あなたはどなたさまでしょうか」と、とんちんかんな質問をするような者に現れてくださった。ということは、「私は聖書がよくわからないから」とか「私は信仰が小さいので」などと言う必要はない。主は、たとえ小さな信仰であったとしても、その人に現れてくださいます。

二つ目。そこまではいいのですが、心配が一つある。もし現れてくださったとしても、この方が主の使いであるとわかるのだろうか。現れてくださったけれど、気がつきませんでした、というのであれば意味がない。

マノアはどうだったか。「あなたはまだ、わたしのことを理解できる信仰がありません。」そんなふうに主の使いから言われました。学校の試験であればそこで終わりです。しかし聖書はそこで終わりません。小さな信仰しかないのであれば、主ご自身が信仰を増し加えさせてくださり、理解できないというのであればわかるようにして下さって、ご自分のことを知らせようとされます。これが二つ目のことです。

2) 不思議なことを見る

では、具体的にはどんなことが起きたか。19, 20節。「そこでマノアは、子やぎと穀物のささげ物を取り、それを岩の上で主に献げた。主のなさる不思議なことを、マノアとその妻は見ていた。炎が祭壇から天に向かって上ったとき、主の使いは祭壇の炎の中を上って行った。マノアとその妻はそれを見て、地にひれ伏した。」

マノアは、ささげ物を岩の上に載せただけで、火はつけないで、妻と二人でこのあと何が起きるかじっと見ています。そうすると、突然炎が天に向かって立ち上ったと思ったら、御使いがその炎の中を天に上っていった。「見ては行けないものを見てしまった」と言うときがあります。何か夢でも見たのだろうかと思って、周りを見渡すと主の使いがいません。これは夢でも幻でもない。この不思議なことは主がなさったことなのだと悟り、思わず地にひれ伏します。ここで初めてマノアはあの人が主の使いであることをと知ることになります。

3 信仰

1) 死の恐怖

さて、いま主の使いがマノア夫婦の信仰をどのように強めていったのかを見てきました。まとめると、主の使いは二つのことをしています。一つ目。岩に載せたささげ物から突然炎が天に上り、その中を主の使いが上って行く。これはどう考えても、人間の理解を超えています。しかし神は、このようなことがおできになる方である。もっと言えば、死んだものをも死からよみがえらせ、永遠のいのちを与えることのできる方である。それが神なのだ。私たちの目には不思議なこと、信じがたいこと、理解できないように思えることを、マノア夫婦は目の当たりにします。

主の使いがしたこと二つ目。この夫婦が不思議な光景を見てどうしたか。地にひれ伏します。恐くなって頭をかかえて震えたというのとは違います。神がそこにおられるという圧倒的な存在感に襲われました。きよい光が輝いています。その光は心の内側まですべて照らしだし、奥底に隠れていた罪が明るみにしていきます。そうしたら人はどうなるか。マノアを見てください。彼は、自分たちは死んでしまうとおびえた。なぜ死ぬと思ったのか。罪を自覚したからです。自分は死ぬべき罪人であると知った。自分の罪を知ったとき、マノアはその人が主の使いであったことを知ることになりました。

神を知るということはこのようなことです。聖書の勉強をすることは無駄ではありません。しかしもっとも大切なのは、自分がいかに神の前で汚れる者であるのか、そのことがわかればわかるほど、それに比例するように神を知るようになっていきます。

2) 神の救いを信じる

いまこんなふうに簡単に言いましたが、実際は自分の罪を知ることが、非常に恐ろしい。なぜ恐ろしいか。さばかれて死んでしまうからです。マノアはそれを考えて取り乱してしまっただけです。

どうしたらよいのでしょうか。主は私たちをご覧になり、なんとかしなければと思われ、御子イエス・キリストを降して、あなたの罪は赦されていると宣言してくださいました。私たちはすでに十字架によって罪が赦されているとの約束をいただいている。だから恐れなくて自分の罪を告白することができます。荷を降ろすことができる。自分の暗闇に潜んでいる罪を見たら悲しくなります。自分で自分が嫌になります。

しかし、主がすでに私たちの暗闇に立ってください、大丈夫だから私の十字架のところに来なさ

い。あなたに不思議なことを見せて上げよう。あなたのためにわたしイエスは、いのちを捨てます。だから、わたしを信じなさい、と言って招いてくださいます。

罪深い私たちのために 十字架におかかりになった主とともに、また歩んでまいります。